

「医療を否定する本」に 迷わされてはいけない

～「かかりつけ医」を持とう～

過去に、近藤 誠著「患者よ、がんと闘うな」(文春文庫)への反証として本紙に文章を綴ったことがあった。目の前の患者さんが、この本の犠牲になったことへの怒りとむなしさに駆られてのことであった。

玉城さんは60歳代の主婦。住民検診で発見された早期(I期)の肺がんで、全く自覚症状は無かった。突如として降って湧いた事態に動転。現代の医療を否定したこの本を読み、治療を拒否し民間療法に走った。約2年3ヶ月の経過でその生涯を閉じた。

またしても現代医療を否定する本が出回り売れている。検診(健診)を否定し、手術、抗癌剤、放射線治療をも否定する。医者が書いた、現代医療の不確実な要因を指摘した本だけに、一般の方々には強烈な印象を与える。「がんと闘うな」から飛躍して、「医者に殺されない47の心得」(アスコム)とある。無視する事にしていたが、診療の現場で、さらに被害が広がりつつあり看過できない。

集団を対象とした「検診」と個々人の健康管理を目的とした「健診」の意味合いは異なる。科学的に有効性の証明された検査手段でもって、がんの発見率、死亡率の数字を評価する検診があり、他方、個人の私生活の背景から、健康を維持増進するために「顔色をも評価する」健診がある。

現代医療を否定する本の著者は臨床医ではなく、数字に興味を抱いた医学者です。医療を提供する側と受ける側。いずれも人間の行為であり、数字では処理できない不確定な要因は常に存在します。患者さんと共に悩み、現代医療の限界をも意識しつつ、より良い方策を模索し続けるのが診療の現場です。

より正しい情報の選択のために、なんでも相談できる「かかりつけ医」を持ち、信頼関係を築くことが基本です。特殊な分野については「セカンド・オピニオン」を求め、持ち帰って「かかりつけ医」とさらに相談を重ねる。偏った、刺激的な情報に迷わされないために。

医学は着実に進歩しています。昨年、当院で切除された肺がんは113例でした。切除率(手術になる確率)は、年間全肺がん例の50%を超えました。病気の早期発見による縮小手術が増えました。100%にはほど遠い数字ですが、30年前は約30%でした。

長尾和宏著の「医療否定本」に殺されないための48の真実(扶桑社)に、臨床医の目でみた現代医療の評価が記されています。患者を診ない医学者の数字の魔術ではなく、患者に寄り添う臨床医の思いが綴られています。